

僧肇の般若無知攷

藤堂恭俊

僧肇(384—415)の般若に關する見解は彼の般若無知論(肇論所收)に伺うことが出来る。この論は高僧傳卷第六に「出大品後。肇便著般若無知論凡二千餘言。」(僧肇傳中)と傳える如く、弘始五年(403)四月廿三日大品般若經が鳩摩羅什により譯出されて間もなく著わされたものとして、僧肇の廿歳前後—鳩摩羅什が長安に來至してから三、四年經過した頃の見解を表示したものであることが知られる。この般若無知論が基づく思想材を引用諸經論に求むるに、放行、道行、寶積、成具經の如き鳩摩羅什以前の譯出經典とならんで龍樹の中論を引用していることは注目に値する。即ち中論は弘始十一年(400)鳩摩羅什により譯出されたのであり、しかも劉程之は僧肇への書翰において「去年夏末。始見生上人示無知論」(肇論所收)と告白しそれはおそらく道生が「義熙五年(409)還都。因停京師。」(出三藏記集卷第十五、道生傳中)と言われる年であるから、未譯の中論を引用したものと考えられる。それは中論觀因緣品の大意を示すものであり僧肇が鳩摩羅什より親しく聽聞受學したのであらうと推定される。かく短文ではあるが未譯の中論を使用していると言ふことは、鳩摩羅什の譯出事業を考える場合特に留意さるべきことであるとともに、僧肇の般若無知に關する見解を考えるにあつても、大いに注意して置くべきことである。

僧肇の般若無知攷(藤堂)

僧肇は般若をもつて所知に對する能知となし、眞智もしくは聖智と呼ぶことにより惑智に對して用いている。かく般若を惑智に對して聖智と呼ぶ所以は、彼の注維摩經卷第四に「在佛名一切智。在菩薩名般若。因果異名也。然一切智以無相爲相。以此起般若。般若亦無相。因果雖異名其相不殊也。」と言うにあきらかであり、又この「其相不殊」と言う所以を説示するものが外ならぬ般若無知である。僧肇によつて眞智、聖智と言われる智は佛教の第一義諦にかかわる知であるから、「有所知則有所不知」と言うような、一定の立場に立つところの知を指すのでなく、むしろそのような知と言ふ作が立場なき立場においてなされることを意味する無知と言ふ言葉にシノニムされるものである。従つて無知は、一定の立場に立つところの知が立場なき立場に立つ知に轉換することを要求するものであり、無を知る(惑智)と言ふような對象的知を指すのでなく、もしそうであるならばそれは無知ではなく、無を知ると言う知即ち知無であり、有知なるものとして無知と異なるものである。なぜならば、「眞諦非所知故眞智亦非知」と言つているからである。この點、立場なき立場における知としての無知は、心行所の滅を指すものであり、非對象としての第一義諦に呼應するものであることが知られる。このことを言いかえると、「無知」・「未嘗取所知」とか、あるいは「眞諦自無相」・「眞(諦)則非緣」とか言う僧肇の表現自身が物語つてるように、能知、所知と言ふ世俗の形態における知の自體空なることを示すものである。

しかるに僧肇は「有所知則有所不知」と言う世俗の知に對し、「以聖心無知故無所不知」と言い、ひとたび空無化された知において、知なる作の恢復を強調する。この知の恢復は、單なる世俗知の

領域のものとして考えられ易いから十分な検討を必要とする。今ここに「非有故知而無知。非無故無知而知」と言う般若無知論の一文を、彼が引用した未譯の中論觀因緣品の大意―「物從因緣有故不眞。不從因緣有故即眞」と言うのに準據して、知の恢復が單なる世俗知としての領域に屬すべきものでないことを論じようと思う。即ち「非有故知而無知」と言う前半の句は、「不從因緣有故即眞」と言われるように、知が相依相待と言ふ緣起によつて成立つていような世俗の知でない所以を、無知と言ふ表現において示さんとするものであり、そのような相依相待という緣起の外にあることを示す無知は、相依相待なる世俗の形態においては成立たない知ではあるが、勝義の世界において眞實である所以を示さんとするものが、「非無故無知而知」という後半の句である。従つて「無所不知」と言うことは知の恢復であると斷じて言うことは出来ない。なぜならば「知即不取」と言われる所以は、若し「從因緣有」と言われるような、相依相待の上に成立つ知であるならば必ず所取、能取の形態をとるが、「不從因緣有」と言われるような、眞實知であればこそ、「不取」として所取、能取の形態をとらないことを示すものである。即ち「故能不取而知」と言われるように能取によつて能取されることなき知である。かくして「無所不知」と言う知は世俗知の領域に屬するものでないことが明白となつたのであるが、先に指摘したように無知の知は「無所不知」と言われる知と共に、知と言ふ作の否定でなく、その作が立場なき立場において爲されることを示すものであるから、「聖智之用未知暫廢」と言う所以が知られる。

このように僧肇の「無知故無所不知」と言う般若に關する見解は、その根底に中論の思想が嚴存しているのであり、鳩摩羅什がその譯

出に先立つて僧肇に説示した中論の思想を離れて考えることが出来ない程、密接な關聯を持つものである。この意味に於て般若無知論における中論の思想的役割は等閑視するべきではない。かかる般若に關する理解において見受られる論理のはこびは、「法身者無爲而無不爲（注維摩經卷第三）」と言われる彼の佛身觀を始め、その他所々に使用されている點、僧肇の思想を一貫するものとして見逃すことの出来ないものである。然るに「無知而無所不知」とか「無爲而無不爲」と言う表現自體は老子第三十七章に「通常無爲而無不爲」にそのみなもとを持つものであることは言うまでもない。このようなことが般若の正しい理解者であると言われる僧肇において見出されることは一見奇異を感じるであろうが、「愛好玄微。每以莊老爲心要。嘗讀老子道德章乃歎曰。（中略）猶未盡善也。後見舊維摩經。歡喜頂受披尋翫味」（高僧傳卷第六、僧肇傳中）と傳えられる如き、彼の生活經驗を考慮に入れるならば當然のこととされねばならぬのであり、この一事をもつて僧肇の般若觀が格義であると言いきることが出来るであらうか。僧肇によつてしばしば使用されている「無知而無所不知」、「無爲而無不爲」と言うような表現自身に釘づけられることなく、その表現の裏に存する思惟そのものに注目すべきである。

本研究は昭和廿八年度における文部省科學研究助成補助による「六朝時代における佛教受容」の一部、特に鳩摩羅什譯出諸經論の受容に關する一成果である。